A study on Zero Pronouns in Japanese : From the Viewpoint of Domain Unification

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4673

氏　　名	早 川 幸 子
本　　籍	愛知県
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	社博甲第17号
学位授与の日付	平成12年３月22日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第４条第１項）
学位授与の題目	日本語におけるゼロ代名詞に関する研究　－領域の単一化の観点から－ （A Study on Zero Pronouns in Japanese －From the Viewpoint of Domain Unificaton－）
論文審査委員	委員長　柘 植 洋 一 委 員　大 瀧 幸 子，新 田 哲 夫

学位論文要旨

本研究の背景と目的

これまでゼロ代名詞の研究は，英語の現象に基づく統語的制約をそのまま日本語に適用するものが多く，そのような分析では説明できない現象も少なくない。また，これまでの統語的研究の関心は日本語のゼロ代名詞に束縛理論をいかに適用するかという限られた議論に集中しており，ゼロ代名詞の現象全体を見渡す研究はなかった。

そこで，本研究では，これまで主に統語的分析で説明できなかった日本語のゼロ代名詞の現象を非統語的アプローチにより分析し，統語的要因と非統語的要因がどのように相互に関わり合っているかを明らかにすることを目的とする。さらに，ピリオドとピリオドの間に収まる複文だけでなく，ピリオドを越えた文の連続である談話におけるゼロ代名詞の分布及び指示をも対象にし，ゼロ代名詞の現象全体を説明する統一的原理を探ることも本研究の目的である。

各章の要約

第２章ではゼロ代名詞の分布及び指示と統語構造との関係を観察し，観察結果について統語的説明を試み，統語的に説明できないのはどのような現象であるかを整理した。

第３章では，これまで十分な説明が与えられていない現象に焦点を当て，非統語的要因の関わりを探った。

従属節のゼロ目的語は(1)〜(5)のように，主節の主語と同一指示の解釈が可能なものと不可能なものがある。

(1)* 太郎ｉは［花子がφｉ手伝った］と言った。
(2)　太郎ｉは［花子をφｉ手伝った］ことを評価した。
(3)* 太郎ｉは［φｉφｉ愛している］女が好きになれない。
(4)　［太郎はφｉお金を貸したので］花子ｉは家賃が払えた。
(5)*　［太郎はφｉお金を貸したので］花子ｉはうれしかった。

本来ゼロ目的語が主節の主語を指示できない環境は単文であり，複文の従属節のゼロ目的語は統語的には主節の主語と同一指示の解釈が可能なはずであるが，事実は(2)(4)のように可能なものと(1)(3)(5)のように不可能なものがある。そのような解釈が不可能な複文は何らかの要因で単文と類似の環境，

つまり領域が単一になっていると考えることでこの現象を説明することができる。補文及び副詞節では主節動詞が(1)の「言う」(5)の「うれしい」のような logophoric な述語の時，非文になっており，領域の単一化には述語の logophoricity が関わっていることがわかる。一方，関係節では，関係節自体は文の主要素ではなく，主要素は単文構造を成すことから，単一化の要因は統語構造であると考られる。こうして領域が単一化した環境では empathy 制約がかかる。[注1]

(6) 太郎 i は［φ i 花子を手伝った］と言った。

(1)が不適格であるのに対して(6)が適格であることは empathy 制約から予測できる。(6)の主節の主語と同一指示の従属節の主語はゼロ代名詞化できるのに対して，(1)の従属節は目的語に empathy を置く動詞ではないため，目的語がゼロ代名詞化できないのである。しかし，領域が単一化しない(2)では empathy 制約はかからない。従って，ゼロ目的語は主節の主語と同一指示の解釈は不可能であるという一般化はできない。

ここで取り上げた２つの非対称性は，従来，主語・目的語といった文法機能による非対称性と，補文，関係節，副詞節という統語構造の相違による非対称性として議論されてきた現象であるが，実際は，領域の単一化や，主節動詞の意味，empathy 制約という非統語的要因によるものであることが明らかになった。

さらに，次の(7)(8)にも，ゼロ目的語の解釈に関わる非対称性が見られる。

(7)* 太郎 i は［花子がφ i 手伝った］と言った。（=(1)）

(8) 太郎は i ［花子がφ i 殴った］と言った。

(7)(8)はどちらも logophoric であるため，ゼロ目的語は主節の主語との同一指示が不可能であるはずであるが，適格性の相違が生じるのは従属節の動詞の相違によるものと考えられる。(7)の「手伝った」のように「手伝ってくれた」にして，目的語に empathy を置く手段がある動詞，つまり［+benefactive］の動詞の場合は，empathy を目的語に置く手段があるにも関わらず，意図的な empathy 制約違反であるためのペナルティーによって，ゼロ目的語は主節の主語と同一指示の解釈が不可能になる。一方(8)の「殴った」のように，「～てくれる」という形にして empathy を目的語に置く手段のない動詞，つまり［−benefactive］な動詞の場合は非意図的な違反であるためペナルティーがないと考えられる。

このように，これまで統語的な非対称性として議論されてきた現象には，多くの非統語的要因が関わっていることが明らかになった。

第４章では，複文のうち，補文のゼロ主語に焦点を絞って考察した。補文には主節の主語が logophoric なものと客観的な動詞のもののほかにいわゆるコントロール構造の補文がある。

(9) 太郎 i は花子の［φ i /*次郎が今晩電話する］と約束した。

(10) 太郎は花子 i に［φ i /*次郎が留学するよう］説得した。

コントロール構造では，(9)(10)のようにゼロ代名詞の先行詞は，それぞれ主語と，目的語と唯一的に決まり，また補文の主語の位置に語彙的名詞句は生起しない。それに対して，非コントロール構造の補文ではゼロ主語は文中の先行詞の他に談話の中で同定可能な先行詞も指示しうる。また補文の主語の位置には語彙的名詞句も生起可能である。従来，補文のゼロ主語についても統語的分析がなされてきたが，これらの補文が同じ統語構造を持ちながら，ゼロ代名詞の分布及び指示が異なることが統語的分析では説明できない。補文というのは主節の動詞の補部であり，その主要部である動詞の語彙的性質を反映していることを考えると，補文の分析には，動詞と補文の意味関係を考慮することが必要である。そこで，本研究では補文と動詞の意味関係に注目して，補文を４つのタイプに分類し，それぞれのタイプについて，ゼロ主語の分布及び指示の特性を意味関係から予測した。それぞれのタイプの動詞についての例文を検討した結果，予測が正しいことが明らかになった。

第５章と**第６章**では，ピリオドを越えた文の連続である談話において，どのような条件でゼロ代名詞での指示が可能かを考察した。書かれた文の談話を扱った**第５章**では，照応形を決めるのは，前の

同一指示の名詞句との線的距離や叙述のタイプではなく，照応形を含む文が先行詞を含む文に対して持つ意味関係であることが明らかになった。２文がどのような意味関係を持つ時，ゼロ代名詞が生起するかを実際の談話資料で調べた結果，「詳述」「判断」「並列」「逆接」「継起」「補足説明」の意味関係を持つ時，ゼロ代名詞での指示が可能であるが，「背景」「展開」などの意味関係では，ゼロ代名詞による指示は不可能で，語彙的名詞句を繰り返さなければならないことが明らかになった。

複文では，主節の主語と同一指示の従属節の主語はゼロ代名詞化が可能であることを見たが，談話では，ある意味関係ではゼロ主題が可能であるが，ある意味関係では不可能である。これは，「詳述」「判断」「並列」「逆接」「継起」「補足説明」の意味関係は結束機能を持ち，ピリオドを隔てた２文が１つの領域に入り，ピリオドとピリオドの間の複文と類似の環境になるためゼロ主題が可能になるのだと考えると，うまく説明できる。逆に，「背景」「展開」の意味関係には結束性がなく，複文と類似の環境にはならないため，ゼロ代名詞の生起が不可能で，語彙的名詞句が必要になると考えられる。

第６章では，会話文において，照応形としてゼロ代名詞が選ばれるのはどのような時で，語彙的名詞句が選ばれるのはどのような時かを考察した。考察にあたっては，Sacks の話者交替システム（turn-taking system）および，隣接ペア（adjacent pair）という概念を用いた。

その結果は次のようである。

１つの隣接ペアに属する第１ペアパートの名詞句と同一指示の名詞句が第２ペアパートにあれば，ゼロ代名詞で指示できる。また，隣り合う２つの隣接ペア，あるいは長距離を隔てる２つの隣接ペアが並列，あるいは詳述の関係にあるとき，ゼロ代名詞での生起が可能になる。このように，ゼロ代名詞での指示が可能になるのは，１つの連鎖が継続していると理解される時である。照応形として語彙的名詞句が選ばれるのは，連鎖のはじめと連鎖が終了したと理解されるときである。

書かれた文の談話においては意味的関係によって結束性が生じることを見たが，会話を構成する単位である隣接ペアの２つの発話は，文の意味関係によって結びついているのではなく，話者が相手を指定して発話し，相手はその発話の要求に応じた発話を返すという語用論的な要因で結びついている。

統一的説明

これまで，ゼロ代名詞の生起する条件あるいは生起できない条件を見てきたが，どの環境にも共通して見られる条件は一つの領域になる，つまり領域の単一化であることが明白になった。領域の単一化には２種類あり，１つは複文における領域の単一化で，これが，主節の主語と同一指示の目的語が省略できない要因である。この領域の単一化は補文と副詞節では動詞の logophoricity により，また関係節では統語構造により生じる現象である。もう１つの領域の単一化は，ピリオドを越えた２文における領域の単一化で，ピリオドの間の複文と同様に，同一指示の主題が省略できる要因である。この領域の単一化は，書かれた文の談話では意味的要因により，会話では意味的・語用論的要因により生じる現象である。

ゼロ代名詞の現象には，多くの非統語的要因が関わっていることが明らかになったが，複文の照応現象には非統語的制約のみが関係しているわけではない。まず，Ｃ統御制約や束縛原理などは基本的制約である。従属節が補文であるか，関係節であるか，副詞節であるかという構造上の相違が，統語的および非統語的制約のかかり方を左右している。補文は動詞の補部であるという統語的構造により補文と動詞との意味関係が重要であること，関係節は文の主要素でないため，動詞の意味特性とは無関係であること，副詞節は主節からの独立度が高い構造であるためＣ統御の制約を受けないことなどである。また，ピリオドとピリオドの間の文には文文法つまり統語規則が支配しているのに対して，ピリオドを越えた文の連続は文文法の支配を受けない。そのように統語的制約が関わらない領域ではその他の要因が支配すると言える。書かれた文の談話における照応には，統語制約に代わって意味的要因が関係し，会話では意味的・語用論的要因が関わってていると考えられる。

まとめと今後の課題に向けて

以上のように，本研究では，日本語のゼロ代名詞の研究においてこれまで課題とされてきた問題を非統語的アプローチにより解明し，それぞれの環境で統語的要因と非統語的要因が相互にどのように関わり合っているかを見ることができた。その結果，日本語のゼロ代名詞に関わる現象全体を統一的に説明することができた。

日本語のゼロ代名詞，つまり名詞句の省略は日本語だけの現象ではなく，照応という普遍的な現象の一部である。そこで，**第７章**では，日本語のゼロ代名詞の現象には，照応の普遍性と個別性がどのように現れているかを探るため，他言語の照応との比較を試み，限られたトピックについて共通点と相違点を観察した。また，考察した範囲では，英語では統語的要因が強く，日本語，中国語では談話的意味的要因が優勢であるという傾向が見られた。

ゼロ代名詞を含む照応の研究はこれで完成したわけではない。普遍性と個別性を明らかにし，照応の全体像を統一的に説明する原理を探る今後の研究に，本研究の成果が貢献できれば幸いである。

注１

empathy 制約（Ohso）：同一指示の２つの名詞句に話し手が empathy を置く時，２番目の名詞句は(a)主語の位置にあるか，(b)empathy を目的語に置く動詞の目的語の位置にある時，ゼロ代名詞が可能である。

Abstract

In this paper I have investigated the conditions under which zero pronouns are permissible. My objective is to propose a unified principle which explains the whole zero pronoun phenomena and to clarify how syntactic and non-syntactic factors interact.

I propose that domain unification prevents zero objects coreferent with matrix subject from occurring and that semantic and discourse notions such as empathy, logophoricty and benefactiveness are also involved in this phenomenon. In complement structures the semantic relations between verbs and complements rather than syntactic constrains play a crucial role in predicting the distribution of zero pronouns and their reference.

Furthermore the domain unification makes permissible zero subjects coreferent with matrix subject in discourse, two sentences in written discourse are united into one domain by inter-sentential semantic relations, and two utterances in conversation are united by pragmatic reasons.

All these discussions lead to the conclusion that domain unification is responsible for permission and prohibition of zero pronouns and that it is caused by non-syntactic factors. It was also shown that in complex sentences syntactic and non-syntactic factors interact, syntactic factors determining how and what non-syntactic factors are involved. In discourse, on the other hand, non-syntactic factors come into play in stead of syntactic ones.

学位論文審査結果の要旨

本論文は日本語に見られる省略現象のうち，名詞句の省略＝ゼロ代名詞の出現に焦点をあてて論じたものである。この現象は日本語についてはこれまであまり取り上げてこられなかった。また，取り上げる場合も，もっぱら英語での類似現象との関連から，統語的要因で説明しようとするものであった。

それに対し，本研究は統語的要因だけではこの現象を十分に解明したとは言えないとし，談話的・意味的要因という非統語的要因の関わりを指摘し，それを明らかにすることにより，この現象を統一的に説明しようとするものである。

すなわち，これまでの分析では，複文に於いて，１）名詞句が主語である場合と目的語である場合のゼロ代名詞化の非対称性，ならびに２）補文および関係節の場合と副詞節の場合の非対称性，という統語的要因が関わっていると指摘されてきた。しかし，本論文ではこれらの例を綿密に検討・分析するなかから，empathy，主節動詞の logophoricity，従属節動詞の benefactiveness といった談話的要因ならびに意味的要因が関わっていることを明らかにし，また，これらの非統語的要因と統語的要因の関連を解明して，複文での現象を明快に説明することに成功している。更に，より大きな発話のまとまりである，談話の分析もおこなって，談話の場合には意味的要因，語用論的要因により代名詞の生起が説明できると論じている。そして，その結果，ゼロ代名詞の生起については，どの環境でも（＝複文でも，談話でも），領域の単一化という原理が条件として存在することを明らかにした。

こうした論者の議論は極めて説得的であり，従来見過ごされてきたあるいは説明に矛盾が来すような例を明快に説明するものである。また，これらの成果とならんで，英語やイタリア語などの他言語での現象についても，随時言及をしているように，本研究は個別日本語での現象の解明にとどまらず，言語に見られる照応関係の全体的な姿を解明するという点での人間言語の普遍性を明らかにする上でも多くの貢献をなすものである。

もちろん，談話における現象については，論者の論じている以外にも更に多くの要因が関わっており，それらについて更に考察を加えることが必要であろうし，現実の日常会話をデータとしての分析が望まれるし，書かれたテクストに関しても，意味関係の捉え方については更に精緻化が求められよう。

しかし，これらの不完全な部分が認められるものの，総合的に見てみると，各部分における論証は確実かつ厳密であり，全体の構成も堅固なものとなっており，全般にわたって高い水準を示しており，照応現象一般の考察にも大きく貢献するものと考えられ，審査員一同十分博士論文に値するものと判断した。